

令和五年八月

# 夏季鍛錬紙上句会

主催 俳人協会 秋田県支部

選者

俳人協会青森県支部長

「薰風」代表・「沖」同人

小野 寿子

俳人協会山形県支部長

「胡桃」主宰・「初蝶」同人

鈴木 正子

俳人協会宮城県支部顧問

「駒草」同人

小林 里子

# 夏季鍛錬紙上句会の成績

## 小野 寿子 先生 選

特選	海の日を海軍たりし父知らず	打川 典子
特選	老人の合掌ながき原爆忌	伊藤たよ女
秀逸	鳥海山の稜線長し田水引く	木村 登龍
同	蚊遣火や生家の時間ゆるやかに	津谷 郁哉
同	鉢巻の固き結び目夏祭	津谷 郁哉
佳作	途切れたる話を繋ぐ扇子かな	麻生 白風
同	人一人会はぬ炎天樋屋町	田村 陽子
同	落成の学び舎つつむ青葉風	岩谷 塵外
同	祝米寿みんない顔席涼し	小坂 富子
同	なすび漬水の紫紺も皿に盛り	保泉 草笛
同	リハビリの窓辺明るき花葵	木村 登龍
同	たちまちに鳥海山かくす白雨かな	二藤 誠祥
同	宿題は雲の観察夏休	熊谷 尚
同	裾野まで入り日に映える青田かな	西東 善秋
同	秋田露刈れば拡がる羽後の空	加藤 一弥

## 鈴木 正子 先生 選

特選	奥入瀬の瀧何本も立ち上がる	岡部 いさむ
特選	竿燈の長い停止に拍手わく	園部 露郷
秀逸	入り船に鷗むらがる大南風	高田 洋子
同	また待った葎簀の蔭の昼将棋	神成 石男
同	酒樽の並ぶ三和土の涼しさよ	二藤 誠祥
佳作	途切れたる話を繋ぐ扇子かな	麻生 白風
同	篝火に疲れ知らずの薪能	岡部 いさむ
同	明るさは滅びの姿螢とぶ	岡部 いさむ
同	蚊柱を大きく巻ひて牛歩む	佐々木 公平
同	葎すずめ護岸工事に物申す	岩谷 塵外
同	風宥め挑む妙技や昼竿燈	山田 草人
同	行間に朱の加筆ある書を曝す	伊藤 恵美子
同	父母も同胞亡きも盆の里	岡部 由比女
同	秋田露刈れば拡がる羽後の空	加藤 一弥
同	川幅を使ひ切つたる流燈会	斎藤 淳子

## 小林 里子 先生 選

特選	蚊遣火や生家の時間ゆるやかに	津谷 郁哉
特選	川幅を使ひ切つたる流燈会	斎藤 淳子

秀逸	紫陽花や湯浴みの母のひそかなる	大石	愛子
同	清水のむ水ある星に生まれ得て	小林	呼溪
同	ふるさとの川波荒き盃蘭盆会	斎藤	淳子
佳作	途切れたる話を繋ぐ扇子かな	麻生	白風
同	来し方の昭和は遠し冷し酒	岡部	いさむ
同	入り船に鷗むらがる大南風	高田	洋子
同	星涼し歩数かぞえてポストまで	大石	愛子
同	通夜の灯を消すや大きな火蛾一つ	阿部	清流子
同	園児等の名札大きく更衣ふ	木村	登龍
同	たちまちに鳥海山かくす白雨かな	二藤	誠祥
同	教へ子のチェロ聴きにゆく夏ゆふべ	熊谷	尚
同	秋田露刈れば拡がる羽後の空	加藤	一弥
同	遡る源氏の系図土用干し	佐藤	景心

# 投句作品集

- |    |                 |       |    |                  |       |
|----|-----------------|-------|----|------------------|-------|
| 1  | 鳴きに来て一樹一樹が蟬の家   | 加瀬谷敏子 | 21 | 山寺の一段ごとの皆涼し      | 岡部いさむ |
| 2  | 夏草に隠れて遊ぶ雀どち     | 加瀬谷敏子 | 22 | 奥入瀬の瀧何本も立ち上がる    | 岡部いさむ |
| 3  | 途切れたる話を繋ぐ扇子かな   | 麻生 白風 | 23 | ひと言の重き話の夏惜しむ     | 岡部いさむ |
| 4  | 母在りし日の蚊帳を出し天日干し | 麻生 白風 | 24 | 来し方の昭和は遠し冷し酒     | 岡部いさむ |
| 5  | 田植機の泥まみれなる矜持かな  | 佐藤 茂樹 | 25 | 果てもたぬ若人の恋花茨      | 岡部いさむ |
| 6  | 田水張り早苗溺るる如くなり   | 佐藤 茂樹 | 26 | 男鹿の海木の葉の舟と弄ぶ夏    | 岡部いさむ |
| 7  | 父の留守無断借用サングラス   | 佐藤 茂樹 | 27 | 声掛けて水遣る日課茄子の苗    | 大橋 風太 |
| 8  | 男二人すぐに蜜豆注文し     | 佐藤 茂樹 | 28 | 子の届く距離までつめて水鉄砲   | 大橋 風太 |
| 9  | 篝火に疲れ知らずの薪能     | 岡部いさむ | 29 | 棟梁の耳の鉛筆夏旺ん       | 瀬川恵美子 |
| 10 | 平安の世へいざないぬ小町祭   | 岡部いさむ | 30 | 生涯の楽しき頃のレモネード    | 瀬川恵美子 |
| 11 | 明るさは滅びの姿螢とぶ     | 岡部いさむ | 31 | 入り船に鷗むらがる大南風     | 高田 洋子 |
| 12 | 観衆の熱気ムンムン夏祭     | 岡部いさむ | 32 | ひなびたる門構へなる鮎の宿    | 高田 洋子 |
| 13 | 風になり光り漂ふ柳絮かな    | 岡部いさむ | 33 | 避暑の宿メールの絵文字えらびをり | 高田 洋子 |
| 14 | ユツカ咲き少年視線伸びにけり  | 岡部いさむ | 34 | 魚屋の呼び声たかき土用入     | 高田 洋子 |
| 15 | 薫風や大空ふんでペダル漕ぐ   | 岡部いさむ | 35 | 出羽富士を静かに飾る夏の星    | 滝澤 幸子 |
| 16 | 竹皮を脱ぐみちのくの敢へなかり | 岡部いさむ | 36 | 庭隅の仄明るきやどくだみの花   | 滝澤 幸子 |
| 17 | 草餅に先に手を出す亡母かな   | 岡部いさむ | 37 | 待ちに待ちし今朝開きたる百合清し | 滝澤 幸子 |
| 18 | 風涼し爪の先まで喜びぬ     | 岡部いさむ | 38 | 甚平出し夫に勧めむゆるぶ顔    | 滝澤 幸子 |
| 19 | 窓開けておほ涼風の深眠り    | 岡部いさむ | 39 | 蓮咲くや辛さ苦しき根に秘めつ   | 滝澤 幸子 |
| 20 | 仁別峽螢の天地補陀寺かな    | 岡部いさむ | 40 | 大型の虹を潜らむ高速道      | 滝澤 幸子 |

41	人一人会はぬ炎天樋屋町	田村 陽子	61	地区こそり藁の鍾馗の更衣	岩谷 塵外
42	明けやらぬ初夏の潟撒き餌せり	田村 陽子	62	打瀬舟絶えて葭切鳴くばかり	岩谷 塵外
43	また待つた葭簀の蔭の昼将棋	神成 石男	63	さくらんぼ宝石の名で世に誇り	打川 典子
44	毀 <small>こぼ</small> さるる生家見据 <small>こぼ</small> ゑる帰省かな	神成 石男	64	海の日を海軍たりし父知らず	打川 典子
45	子に着せる揃ひの甚平肩車	神成 石男	65	父の忌に供ふ走りのサクランボ	小坂 富子
46	万緑の中や旧字の里程標	神成 石男	66	声高に闇を貫ぬく雨蛙	小坂 富子
47	飛行機の揺れに目覚めて雲の峰	佐藤 景心	67	緑蔭や雀を狙ふ猫のゐて	小坂 富子
48	御屋敷に囲はれ庭の秋田蒔	佐藤 景心	68	お茶よりもコーヒーよけれ薔薇の午後	小坂 富子
49	妻籠もる一日をビーチパラソルに	佐藤 景心	69	祝米寿みんないい顔席涼し	小坂 富子
50	路地を行く夜店帰りの下駄の音	佐藤 景心	70	久びさの旅に癒さるはまおもと	小坂 富子
51	秋田港フェリーもろとも夕焼けせり	米屋 道子	71	なすび漬水の紫紺も皿に盛り	保泉 草笛
52	馬洗ふ少年一幅の絵となれり	米屋 道子	72	担任の教師水やる夏休	保泉 草笛
53	丹精の野菜で母の夏料理	米屋 道子	73	蚊帳といふ胎内にゐる安堵かな	保泉 草笛
54	金魚欲しき子の手をとりて夜の町	米屋 道子	74	面を打つ如くに蠅を叩く父	保泉 草笛
55	馬を診る補液の厩夜半の夏	佐々木公平	75	足裏に蛭の記憶濁の風	宇佐見レイ子
56	蚊柱を大きく巻ひて牛歩む	佐々木公平	76	遠き日の打瀬舟の帆夏の夢	宇佐見レイ子
57	棚に待つみどりごの靴柿若葉	佐々木あや子	77	雨止むを待ちて茅の輪をくぐりたる	宇佐見レイ子
58	ふくれゆくビニールプール子は父に	佐々木あや子	78	夕立過ぎみ社の屋根とんがりて	宇佐見レイ子
59	落成の学び舎つつむ青葉風	岩谷 塵外	79	星涼し歩数かぞえてポストまで	大石 愛子
60	葭すずめ護岸工事に物申す	岩谷 塵外	80	紫陽花や湯浴みの母のひそかなる	大石 愛子

81	思ひきり四肢伸ばす児や柿若葉	阿部清流子	101	メロンの香傘寿を祝ふ客となる	浅野 法子
82	城壁の闇を住み処や蚊喰鳥	阿部清流子	102	かくしごと持たぬ友とで冷酒酌む	浅野 法子
83	落ち武者の逃るる山河花茨	阿部清流子	103	沈濫の如き人波大花火	照井志げ女
84	通夜の灯を消すや大きな火蛾一つ	阿部清流子	104	湧水の小石浮かすや暑氣払	照井志げ女
85	子飛蝗 <small>ひじょう</small> の羽根透き通る翠風	松橋テル子	105	風宥 <small>なだ</small> め挑む妙技や昼竿燈	山田 草人
86	甘酒飲み飲む点滴とほくそ笑む	松橋テル子	106	深夜便聞きつ微睡 <small>まどろ</small> む熱帯夜	山田 草人
87	空屋敷風の褥 <small>しとね</small> となりけり	松橋テル子	107	老人の合掌ながき原爆忌	伊藤たよ女
88	欲深く香水吸い込む吾感かな	松橋テル子	108	地藏盆供えてありしおもちゃかな	伊藤たよ女
89	佇みて蟻引く力見てをりぬ	加藤 百桜	109	荒梅雨や雄物の川のたくましき	二藤 誠祥
90	草刈るや肘に汗拭き刈り急ぐ	加藤 百桜	110	久々にピッケル交わし山開き	二藤 誠祥
91	園児等の名札大きく更衣ふ	木村 登龍	111	酒樽の並ぶ三和土の涼しさよ	二藤 誠祥
92	リハビリの窓辺明るき花葵	木村 登龍	112	たちまちに鳥海山 <small>てうかい</small> かくす白雨かな	二藤 誠祥
93	紫陽花のまだ彩の無き雨雫	木村 登龍	113	地ぼてりの黄昏時や牛蛙	森屋 慶基
94	鳥海山の稜線長し田水引く	木村 登龍	114	立ち止まるよもつひらさか登山口	森屋 慶基
95	成すことの裏目続くや梅雨滂沱	加藤 栄女	115	差入の弁当土用鰻かな	高橋 恭三
96	あばれ梅雨日本列島北上す	加藤 栄女	116	庭の樹々叩き夕立過ぎにけり	高橋 恭三
97	夫に聞こえ妻に聞こえぬ蟬の声	齋藤 幸子	117	短冊のゆれる七夕児の願	田口 奎吾
98	何色に今日は染まるの七変化	齋藤 幸子	118	朝顔市笑顔あへしや四年ぶり	田口 奎吾
99	八の字を描きて抜けし茅の輪かな	五十嵐義知	119	白靴のサイズ私たる証	小林 呼溪
100	梅雨空の袋小路を戻りけり	五十嵐義知	120	清水のむ水ある星に生まれ得て	小林 呼溪

140	誰を待つ川のほとりの夏柳	伊藤恵美子
139	豪邸の庭に誇らか秋田露	伊藤恵美子
138	艶を増す風がくすぐる柿若葉	伊藤恵美子
137	行間に朱の加筆ある書を曝す	伊藤恵美子
136	短夜の夢は途切れし米寿かな	西東 善秋
135	裾野まで入り日に映える青田かな	西東 善秋
134	一村に一寺の一木合歡の花	西東 善秋
133	風鈴の音を聴き星の殖えてゆき	西東 善秋
132	夕鮎の跳ぶひかりみて鍬洗ふ	園部 露郷
131	農を継ぐための帰郷や祭笛	園部 露郷
130	水分りは天空の景お花畑	園部 露郷
129	竿燈の長い停止に拍手わく	園部 露郷
128	教へ子のチェロ聴きにゆく夏ゆふべ	熊谷 尚
127	苺煮て見ん亡き母のせしやうに	熊谷 尚
126	宿題は雲の観察夏休	熊谷 尚
125	てつぺんに明日咲くつぼみ立葵	熊谷 尚
124	前のめりのグラジオラスや反骨心	鳥 きく子
123	真二つに手折る胡瓜のほとばしる	鳥 きく子
122	顔紅くバスケの練習西日入る	鳥 きく子
121	梅の実落ちて草茫茫に填まる	鳥 きく子
160	秋田露刈れば拡がる羽後の空	加藤 一弥
159	初茄子鳴かせて今朝も妻は亡し	加藤 一弥
158	おちこちに祭り稽古の笛太鼓	加藤 一弥
157	夏草や川畔に残る生家跡	加藤 一弥
156	青鷺の風景となる川辺かな	高橋 雄子
155	空蟬の忠実に蟬の形かな	高橋 雄子
154	揺るる葉や清きせせらぎ搔き氷	明天地ひろし
153	発車ベルケーブルがたんと薄暑かな	明天地ひろし
152	長梅雨やゆつくり落ちる砂時計	泉 千穂子
151	バーベキューまたも病氣の話など	泉 千穂子
150	いとこといふ人に会ひたる夏休	泉 千穂子
149	噴水が止みて泣きたる吾子のゐて	泉 千穂子
148	鉢巻の固き結び目夏祭	津谷 郁哉
147	蚊遣火や生家の時間ゆるやかに	津谷 郁哉
146	夏めくや玉やうかんの載りし皿	津谷 郁哉
145	石段をかけた上がる子や雲の峰	津谷 郁哉
144	漕ぎだしてとび込む先の夏の空	高橋みつを
143	いも掘りの手伝ふ愛児等カレー好き	高橋みつを
142	父母も同胞亡きも盆の里	岡部由比女
141	万緑やふる里の山かくあらむ	岡部由比女

176	夏負けのにはか葉膳づくりかな	佐藤	景心
175	遡る源氏の系図土用干し	佐藤	景心
174	女医とニッコウキスゲの木道かな	千葉	糸子
173	旅をせし友の亡くなり星鴉	千葉	糸子
172	ひぐらしの声降りしきる畑帰り	安倍	幸一
171	夏草の波を被りてむしりをり	安倍	幸一
170	しばらくは会はない覚悟袋掛け	安倍	幸一
169	少年の瞳のごとき青葡萄	安倍	幸一
168	四日目の妖しき花弁蓮かな	蛭田	庸子
167	雲海へ声を忘るる上高地	蛭田	庸子
166	想ふこと少しはありて夕端居	蛭田	庸子
165	蟬生る広き世界へ葉裏より	蛭田	庸子
164	川幅を使ひ切つたる流燈会	斎藤	淳子
163	ふるさとの川波荒き盃蘭盆会	斎藤	淳子
162	峰雲や菌型とるには目を閉ぢて	斎藤	淳子
161	ペンの影ペンより太き熱帯夜	斎藤	淳子